

目 次

大会プログラム.....1	第4分科会.....7
大会日程.....1	ワークショップ.....7
シンポジウム案内.....2	研究会報告.....8
個人研究発表.....3	幹事会報告.....9
第1分科会.....3	会員からの投稿.....9
第2分科会.....3	会員の著作.....9
第3分科会.....4	会員からのお知らせ
大会案内・参加申込書：必ず送付下さい!!...5	ICUジェンダー研究センター設立のお知らせ...10
会場・宿泊案内.....6	会員情報.....(別紙)

2004年 日本女性学会大会

日 時：2004年6月12日(土)・13日(日)

会 場：鳥取県立倉吉未来中心
 (鳥取県男女共同参画センター よりん彩)

ホームページ：<http://www.pref.tottori.jp/mirai/>

〒682-0816 鳥取県倉吉市駄経町212-5

tel: 0858-23-5390 fax: 0858-47-0255

参加費 非会員：1000円
 会 員：無料

プログラム

第1日

6月12日(土)

12:30 受付開始
 13:00~16:30 シンポジウム
 17:00~18:30 総会
 19:00~20:30 懇親会

第2日

6月13日(日)

9:00 受付開始
 9:30~11:30 個人研究発表
 12:30~15:00 ワークショップ

今大会は参加のお申し込みをお願いします。5頁をご覧ください。

2004年大会シンポジウム ウーマンリブが拓いた地平

基調講演 自縛のフェミニズムを抜け出して 田中美津
—立派になるより幸せになりたい—

パネル・ディスカッション 菊地夏野・千田有紀・原田恵理子

コーディネイター 秋山洋子

1970年代の初め、ウーマンリブと呼ばれる女性運動が起こった。米国に始まり、世界の各地で同時多発的に起こったこの運動は、女性への差別や抑圧に抗議するにとどまらず、女の側から社会のあり方を根本的に問い直すものだった。一部のマスコミから嘲笑されながらも、各地でリブグループが誕生し、集会が開かれ、ビラやミニコミが発行された。ウーマンリブが蒔いた種は、フェミニズム、女性学として芽を出し、成長した。国連女性の10年を経て、全国各地で女性たちの活動が広がり、フェミニズムの主張の一部は、国・自治体の政策課題となった。女性による女性のための学問として出発した女性学も、定着し発展するなかで、制度化され、専門分化してもきた。そういう流れの中で、とくに2000年以降、一部の勢力からのフェミニズムに対する反発や攻撃が強まっている。今まさにフェミニズムが、そして女性学が問い直されている。本シンポジウムは、ウーマンリブとは何だったのかをふりかえり、それが拓いた地平を、その後の運動と女性学がいかに継承・発展させ得たのかを検証する試みである。世代も活動地域もテーマも多様だったウーマンリブ運動を担った当事者の声を聞いて経験を共有するとともに、直接の担い手でない世代と立場から議論を加えることで、今の状況を変革していくための力につなげたい。

(コーディネイター：秋山洋子、担当：内藤和美)

パネラーの発言要旨

菊地 夏野

この30年間のうちに女性の位置は大きく変わった。女性を語る言葉は必ずしも一様ではなくなったし、高い地位につくことも以前ほど難しくはなくなった。これはリブを始めとする女性たちの運動のひとつの成果ではあるだろう。だが「高い地位につく」ことがリブのそもそもの目的であったのだろうか。あるいは「高い地位」は女性たちにとって何のためにあるのだろうか。フェミニズムがひとつの制度的な言説にもなってしまった現在、問題意識から改めて問い直されなければならない。日本のフェミニズムは女性学中心に資源を集めてきたため、学問制度に回収される危険に直面している。理論は必ずしも大学の中にはない。女性解放の戦略としてのフェミニズム理論を一から立て直す時期に 来ていると思う。実践と切り離さない形で。リブはわたしにとって全くの出発点ではあるが、単にそれを懐古する場であっては、逆にリブの「消費」に終わってしまう。そうではなく、リブは常に「なまもの」なのだから、いまここから造っていく、そういう場に立ち会えたらと思う。

(名古屋市立大学)

千田 有紀

リブ生誕から30年が経ようとしている。私たちが生きている現在もまた、大きな転換点を迎えている。戦後民主主義の揺らぎ、ネオリベリズム、新しいナショナリズムの台頭、グローバルイゼーションの波、「ジェンダー・フリー」教育批判をはじめとするフェミニズムへの激しいバックラッシュ……。このような混沌とした状況のなかで、第二派フェミニズムの原点であるウーマンリブから、わたしたちが何を受け取るべきなのか、それをどう活かすことができるのかを考えてみたい。わたし自身は、世代や小さな立場の違いを超えた女の連合を作ることが、これほど求められている時代はないと信じている。小さな波を大きなうねりに結びつけていくにはどうすればいいのか、広く論じていけたらいいと思っている。

(東京外国語大学)

原田恵理子

日本のリブが産声をあげておよそ30年。私自身もリブに出会った20代初めからさまざまな影響を受け、現在の仕事もその延長上にある。これまでセクシュアル・ハラ

スメント全国調査そしてドメスティック・バイオレンス全国調査に関わってきたが、この2つの調査をめぐる社会の反応、行政の対応には大きな変化を感じる。とりわけドメスティック・バイオレンスをめぐる民間女性NGOの取り組みは、DV防止法成立に象徴される被害者支援システム構築の上で大きな役割を果たしてきた。「女性

に対する暴力」問題が日本の女性運動のなかで焦点化され始めた1980年代半ばころからのさまざまな取り組みをふりかえりながら、女性運動／フェミニズムが具体的な施策や被害者支援システムにどのような影響力を持ちえたのか、また今後の課題などを考えてみたい。

(佐賀県DV総合対策センター)

個人研究発表

◎ 第1分科会

司会：伊田久美子

(1) シングル女性のライフコースに対する考え方

釜野さおり

本研究では、シングル女性の結婚、子育て、就業に関わるライフコースに対する考え方に焦点を当て、理想のライフコースならびに予想するライフコースが、女性の年齢、学歴、職業、収入などの社会経済的屬性や、男性との交際状況によってどのように異なるかを、出生動向基本調査（社人研実施）データの分析を通して探る。予備分析の結果、男性の恋人や友人のいる女性の方が、いない人に比べ、結婚・子育て後に再就職するコースや専業主婦コースを理想ならびに予想コースとして選ぶ傾向が強いことがわかった。本発表ではさらに詳細な分析結果を紹介する予定である。



(2) 在日朝鮮人女性とジェンダー

梁 愛 舞

これまで在日朝鮮人女性は、アイデンティティに重要な影響をあたえる儒教的祭祀儀礼（チェーサ）を一身に背負ってきた。この実績は女性が果たしてきた役割として高く評価されると同時に、もう一つの抑圧ではないかという評価もある。現在の在日朝鮮人女性は、アイデンティティ確立の問題と伝統という抑圧からの解放、つまりアイデンティティとジェンダーフリーの課題の狭間で、有効な解答を模索しているのである。この問題を考察する。



(3) 「家族型福祉国家」の社会政策における家族像 —日本の女兒選好・韓国の男児選好による 社会学的分析

山地久美子

本報告では、福祉国家論の中でも「家族型福祉国家」と称される日本と韓国の社会福祉政策に注目し、社会保障の受給者とその扶養家族との関係という新たな視点

で、国家が志向する家族像の考察を試みる。国家の施策としての法律上の家族、そして、社会保障の受け手としての家族が描く「現代の家族像」を、近年顕著になりつつある日本の女兒選好と韓国の男児選好の側面から分析し、両国の社会政策の固有性をジェンダーの視点から明らかにする。



(4) 企業別組合におけるパートのユニオンリーダーとジェンダー意識

—パートのユニオンリーダーはパート差別の
抵抗者となりうるか？

金井 郁

労働組合組織率低下により、新たな組織化対象としてパートタイム労働者が注目されている。パート組織化は、組織拡大の視点が強調される一方、正規とパートの合理的に説明の出来ない処遇差別の解消を推進するものと期待される。形式上、組合の意思決定機関での発言権が保証されるパートのユニオンリーダーの意識を考察し、企業別組合でパート差別の抵抗者となりうるのかを検討する。分析には、早くからパート組織化を進めるスーパーマーケット業界の企業別組合で中央役員を担うパート組合員のインタビューを用いる。

◎ 第2分科会

司会：舘 かおる

(1) 若い世代の自己解放としてのフェミニズム経験と「フェミ」

利光真理子

本研究は、フェミニズムに共感する若い世代の女性たちが、フェミニズムが“社会正義”や“理念”として機能し、自己の生き方を規制する際に、生き方の自由を強めるための手段として捉え直していることをインタビューから論じる。この再創出されたフェミニズムは、個人の快／不快の感覚をよりどころにする「個人化されたフェミニズム」であり、「フェミ」という言葉によって再

び女性の共同化された政治と結びつけられる様子を示す。



(2) 「遅れてきたフェミニスト」がリブから学ぶもの—田中美津の〈とり乱し〉論を中心に

野田さやか

本報告の問題関心は、初めてフェミニズムに触れたのは学問としてであったといったような現在の「遅れてきたフェミニスト」がフェミニズムに寄せるとまどいの問題化である。個々の生き方を問題にした1970年代の日本のウーマン・リブにおいて、田中美津が生き方の模索過程における〈とり乱し〉に積極的評価を与えてきたことに着目し、田中美津の主張を〈とり乱し〉を中心に整理する。また、現在の女性を取り巻く状況から、〈とり乱し〉の可能性と限界を明らかにする。



(3) 「リブの歴史を伝えること」の意味とリブ／フェミニズムの現在

—「行動する会」のケースを中心に

山口 智美

1996年から1999年にかけて、博論研究として「行動する女たちの会」解散から会の記録集出版までのプロセスを、会の活動に参加しながら追いつつ、元会員や他のリブの女たちにインタビュー調査を行った。今発表では、行動する会の記録集が書かれた経過の分析を中心に、「リブの歴史を書く/伝えること」のもつ様々な意味について、70年代からのリブ運動に直接かかわらなかった世代である、私自身の視点も交えて考察する。特に行動する会記録集プロジェクトにおいて重要なテーマとなった、「リブ」の再定義、リブからみた女性学や女性行政、女性間の差異と連帯などについて言及したい。

◎ 第3分科会

司会：新田 啓子

(1) 戦時下のアメリカ映画産業におけるジェンダー・エスニシティー—カルメン・ミランダとThe Good Neighbor Policy

須川亜紀子

1940年代のハリウッドの映画産業は、CIA映画部の意向の元、ある種のプロパガンダ造りに貢献したことは周知の通りである。「カルメン・ミランダ」はThe Good Neighbor Policyの一環としてラテンアメリカ政策と米国国内のラテンアメリカ像を投影された女性スターであ

る。今ではあるバナナ会社のロゴやドラッグクイーンの衣装としてその影響が残る彼女であるが、その実像は日本ではあまり知られていない。本発表では、彼女の映画と彼女をめぐるドキュメンタリー映画をとりあげ、戦時下のハリウッドで構築されたジェンダーとエスニシティーをめぐる問題を分析する。



(2) 兄弟の共生共存と妻殺し—武者小路実篤『愛慾』における家父長的価値観

楊 琇 媚

平等・共生の理念をもって、「新しき村」を創設した武者小路は、人類愛や生命賛美をテーマにした多数の作品を残している。しかし、そうした理念とは裏腹に、作中には女性に対する差別的視点が散見されるのも事実である。ところが、武者小路文学へのフェミニズム批評はこれまでほとんど存在しなかった。本報告は、ある兄弟と一人の女性をめぐる三角関係を描いた戯曲『愛慾』を中心に、家父長的性格を色濃くもっていると考えられる武者小路の思想について明らかにするものである。



(3) 近代異性愛体制と女同士の絆

—「宝塚」と「やおい」の分析を通して

東 園子

本報告では、多くの女性から愛好されているポピュラー・カルチャーである「宝塚」と「やおい」に共通する特徴を分析し、両者への女性たちの支持を生み出す社会の様態について考察する。現代まで続く、男同士の関係を中心とする男性優位の社会は、異性愛によって支えられており、その中で女同士の関係は低く見られてきた。「宝塚」と「やおい」の人気の背景には、同性間の親密な絆への欲求があると考えられるが、それはこのような異性愛体制に対する反発と見なすことができるのである。



(4) 中絶の罪悪感とディスパワメント

塚原 久美

戦後の人口過剰に悩んだ日本は、優生保護法によって世界に先駆けて人工妊娠中絶を解禁した。女性たちは1970～80年代に同法の「改悪阻止」の運動をくり広げたが、その後沈黙し、入れ替わるように登場した新習俗の水子供養が「中絶の罪」を広めていった。今や沈黙する女性たちの頭越しに、中絶胎児の研究利用や不妊治療等生殖関連医療が推進されている。中絶の罪悪感が女性のディスパワメント装置として働いている問題を提起したい。

!!! 参加者は全員お送り下さい !!!

2004年日本女性学会大会申込書

fax: 047-370-5051 5 / 28まで

ご氏名：

ご住所：

(1) 大会に参加します。 *参加される日に○をご記入下さい。

第1日(6月12日) ()

第2日(6月13日) ()

(2) 懇親会に 参加 () / 不参加 ()

(3) 保育希望者は、以下をご記入下さい。

子どもの年齢 (歳) 連絡先 ()

保育希望の日時 ()

今回は県外からの参加者が二日間で延べ100名を超えると鳥取県から助成金が出ます。是非ご参加下さい。

今回は参加人数をあらかじめ把握するためこの用紙にて

5月28日までにファックスで047-370-5051(学会事務局)までお申し込み下さい。

懇親会、保育も同じ用紙でお申し込み下さい。

■懇親会：6月12日 19:00~20:30 セントパレス倉吉にて 会費：5000円

■大会期間中の保育：一時保育のための施設あり(保育料は1時間900円くらい)。

会場へのアクセスと宿について

鳥取県立倉吉未来中心のホームページ<http://www.pref.tottori.jp/mirai/>の案内図をご活用ください。

宿泊について

JTBに大会参加者向けに次の宿・プランを用意してもらいました。

A・Bは、三朝温泉。学会参加者同士3名程度の相部屋。(3名以上の仲間で申込みば、仲間だけの部屋割り)

C・Dは、個室。

宿泊先リスト

記号	利用宿舎	食事条件と旅行代金 (一人あたり)	会場より
A	依山楼岩崎	1泊朝食付 18,000円	タクシーにて15分
B	木屋旅館	1泊朝食付 10,000円	
C	ホテル・セントパレス倉吉	1泊朝食付 7,400円	タクシーにて10分
D	倉吉シティホテル	1泊朝食付 6,400円	タクシーにて5分

羽田空港利用の宿泊・往復航空機セットプラン：一人あたりの旅行代金

利用ホテル	旅行代金
A	55,000円
B	47,000円
C	44,400円
D	43,400円

注：通常の航空運賃は、往復54,000円ですので、だいぶ割引になっています。

：前泊・後泊のご用意もできます。

：氏名、住所、宿泊A～Dの希望をご記入の上、FAXか電話にてお申し込み下さい。

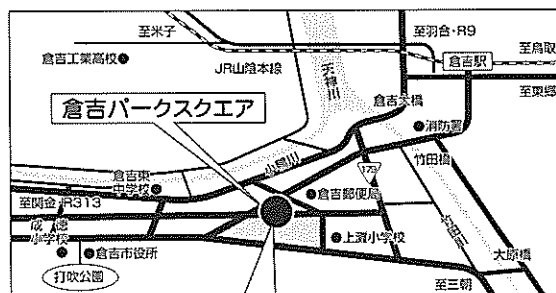
なるべく5月20日までにお願いします。

申込み先：JTB 米子支店 (担当 石尾) tel: 0859-33-5466 fax: 0859-34-0171

mail: yonago_pn1101@kns.jtb.co.jp

高速道路案内

- ・大阪方面から中国自動車道、米子自動車道、湯原ICからR313経由 (大阪⇄倉吉 約3時間15分)
- ・岡山方面から岡山自動車道、米子自動車道、湯原ICからR313経由 (岡山⇄倉吉 2時間)
- ・広島方面から中国自動車道、米子自動車道、湯原ICからR313経由 (広島⇄倉吉 約3時間30分)
- ・高知から高知自動車道、岡山自動車道、米子自動車道、湯原ICからR313経由 (高知⇄倉吉 約3時間30分)



公共交通機関アクセスガイド

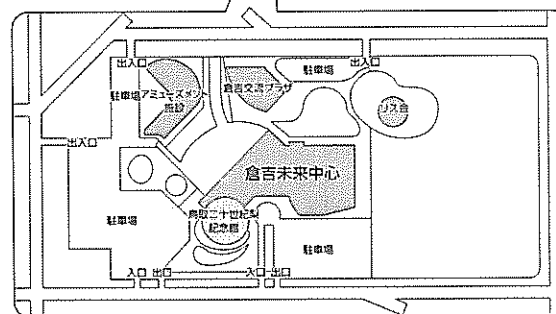
●JR倉吉駅からはバス(倉吉パークスクエア経由)で12分。

鉄道 ■ TRAIN

東京	新幹線・特急スーパーはくと号 (約6時間)
名古屋	新幹線・特急スーパーはくと号 (約4時間)
大阪	特急スーパーはくと号 (約3時間10分)
岡山	特急いなば号 (約3時間)
広島	新幹線・特急いなば号 (約4時間)

高速バス ■ HIGHWAY BUS

大阪	1日7往復 (約4時間)
神戸	1日3往復 (約3時間20分)
広島	1日3往復 (約3時間40分)
福岡	1日1往復 (約10時間)



飛行機 ■ AIR

空港連絡バス (約1時間)	鳥取空港	1日3往復 (約1時間10分)	東京
空港連絡バス (約1時間30分)	米子空港	1日4往復 (約1時間15分)	東京
		1日1往復 (約1時間10分)	名古屋
		1日1往復 (約1時間10分)	福岡

(1) 解放戦略におけるレズビアンのパッシングの由来および概念に関する整理検討

石井 香里

これまでレズビアンのパッシングはレズビアン解放戦略において自明のこととして十分に検討されてこなかった。本報告では、レズビアンのパッシングについて、その由来をアメリカ黒人のパッシングに遡り、レズビアン解放運動におけるレズビアンのパッシングに関する議論を整理検討することによって、レズビアンのパッシングの社会的意味と実践的意義を問い直す。

◇

(2) セクシュアリティの越境可能性—性的指向概念を中心として

堀江 有里

昨今、性的欲望の向く方向性を示す「性的指向」という概念が定着しつつある。その概念を機軸としてとらえるとき、レズビアンと異性愛女性とのあいだには、どのような差異があるのだろうか。それは明確に線引きできる差異なのだろうか。女性の性的欲望は、受動的なものとして位置づけられてきた。そこから、多くの女性たちが自らのセクシュアリティと向き合うことを阻害されるという現実を共有していると考えられる。日本のウーマン・リブ運動のなかでも、男性との権力関係の介在する関係性を放棄し、同性である女性との関係性を模索する人々も存在した。これらの状況から、女性の性的欲望における「性的指向」の越境可能性について考察することが、本報告の目的である。

◇

(3) <老人>のセクシュアリティの歴史社会学—雑誌『婦人公論』における、<老人>のセクシュアリティ—記事の数量的変遷を中心に

関谷ゆかり

雑誌『婦人公論』をとりあげ、セクシュアリティ記事と<老人>のセクシュアリティ記事の相互関係を考察する。特に、以下の2点を見ていく。①『婦人公論』に占めるセクシュアリティ記事の位置と<老人>のセクシュアリティ記事の位置。②セクシュアリティ記事と<老人>のセクシュアリティ記事の数量的な増減傾向とその関係。

◇

(4) ホステスクラブにおける「性的」労働の構図—労働者と顧客のインタビューをもとに

多田 良子

性的労働に関する議論は、日本においては90年代に「性的商品化」というキーワードで多く議論されていた。しかし、そこではその暴力性や、自己決定に関する問題に焦点が集まり、性的労働そのものの実態の分析が十分になされていたとは言い難い。私は、ホステスクラブを事例として取り上げ、そこに従事するホステス（女性）と、その顧客（男性）にインタビューをとることによって、そこでは何が労働として行われ、何が求められているかということをはっきりと明らかにし、ホステスクラブにおいて売買される事柄について考察する。さらにその問題点も指摘したい。

ワークショップ

(1) ウーマンリブの拓いた地平

コーディネーター：秋山洋子、内藤和美、三木草子

ウーマンリブ運動の担い手の経験を聴き、その後のフェミニズム運動と女性学はウーマンリブ運動が拓いた地平をいかに継承・発展させ得、現下の社会情勢にいかにつなげることをめざした、前日のシンポジウム参加者があらためて集い、シンポジウムをどのように聴いたかや、シンポジウムを経ての課題等を話し合いたい。

(2) 政策決定過程への参画を女性のエンパワメントにつなげるために

コーディネーター 船橋邦子・田中かず子

鳥取県の審議会における女性委員の数は40%を越し、全国一位である。2003年、統一地方選挙での女性議員の伸び率にも、変化が見られた。県予算に占めるDV関係予算の割合も全国でトップである。これらの動向は、片山知事の男女共同参画政策に対する積極的な取り組みが大きく影響しているといわれている。

このワークショップでは、開催地である鳥取県内各地域のリーダー、審議会メンバー、議員、自治体職員とともに、いかにして、女性の政策決定への参画が、真の女性のエンパワメントにつなげていくか、市民と自治体の協働のあり方を全国各地の情報交換とともに、討議の場としたい。

(3) 男女共同参画条例をめぐる最近の論点

コーディネーター：橋本ヒロ子・國信潤子

2000年3月、埼玉県・東京都などでの男女共同参画推進条例制定以降、2004年4月現在、46都道府県182市区町村で男女共同参画条例が制定されたが、大きなゆり戻し

が起きている。2003年度に制定された条例の多くに、制定の段階で組織的な巻き返しの動きが起り、宇部市のように保守的な条例も制定された。荒川区のように、古いジェンダー秩序を信奉する学者たちが中心となって条例を作ろうとする動きもある。また、鳥取県、三重県桑名市、松山市などのように、すでに制定された条例が改正(悪)されたケースもある。

全国各地の自治体で起こっているこのような様々な動きにどう対応するのか、各地の情報交換と今後に必要な対応について検討する。

(4) 学会におけるハラスメントを考える

コーディネーター 北仲千里

学会活動には、会員間の対等で公正な関係がベースであることがそもそも必要不可欠であるが、実際には嫌がらせや差別、不公正・不透明な決定などが問題になっている学会も少なくない。日本女性学会としても、現在の学会活動のあり方を見直し、公正で平等な活動がしやすいためのルールづくりに取り組んでいる。このワークショップでは、日本女性学会の活動そのものについて、また、日本女性学会に限らず、学会活動一般におけるハラスメントの問題についてとりあげ、議論する場をもっていく。

■研究会報告

(1) 日本女性学会セクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメント防止規程策定にむけた公開研究会

97号のニューズレター(別冊 2月10日付)でお知らせしたとおり、2003年度の総会で日本女性学会としてのセクシュアル・ハラスメント防止規程を作ると決定したことを受けて、この間ワーキンググループ及び幹事会の議論を経て作られた防止規程案を公表し、会員の意見を募りました。

1. 3月20日を期限に意見を募りましたが、学会事務局まで届けられた意見はありませんでした。
2. 3月7日に公開研究会を開き、そこでは、学会がこのような規程を設けることの意義が評価されると同時に、①女性学会としてなぜこのような規程を作るのか、まずその位置づけや現に女性学会が抱えている問題が明示されていない。②倫理委員会の構成や、倫理委員会の機能が苦情処理にもっぱら集中していることの問題 ③倫理綱領の位置づけをもっと明確に ④「学会活動」の定義が曖昧、などの貴重な指摘を受けました。
3. 3月30日の幹事会で、こうした経緯をふまえて議論し、「規程案のかなり大きな修正が必要であり、また会員間の活発な議論ができていない。そこで、6月の次回総会の場で完全な形での防止規程を急いで決定することはせず、総会及び次期幹事会へと議論を引き継いでいく」という結論になりました。

(北仲千里)

(2) ミード研究の現在

講師：山本真鳥さん(法政大学)

日時：2004年2月7日 13:30-16:30

場所：御茶ノ水女子大学生活科学部会議室

参加者：女性学会関係者等15名

最近のバックラッシュ派による女性学批判の1つに、「マーガレット・ミードは完全に否定されている!」がある。揚げ足取りの議論にまともにつきあう必要はないものの、'70年代以後の研究の進展も無視できないので、ミード批判を経た後の、文化人類学界におけるミードの位置づけ等を専門家に伺いたいということで、山本さんをお招きし、研究会を開催した。

山本さんは、『サモアの思春期』をめぐるフリーマンvsミード論争、ミード『3つの未開社会における性と気質』、『男性と女性』の内容を整理紹介した上で、ミードの功罪として、ジェンダーのコトバすらない段階で、ジェンダーの概念を構想したことの功績の半面、あまりに図式的であるため誤りもあったことなどを、具体的に指摘された。これを受けて、活発な議論がなされた。

(井上輝子)

(3) プレ大会シンポジウム研究会「ウーマンリブが拓いた地平」

3月27日(土)に、お茶の水女子大学で、前みち子さん(デュッセルドルフ大学教授、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター客員研究員)および6月の学会大会のシンポジウム「ウーマンリブが拓いた地平」で発題者を務められる方々を招き、大会シンポジウムに向けた研究会を開催した。まず、前みち子さんに、「ドイツから見た日本の女性運動—交差する内外の視点—」と題して報告いただいた。前さんは、ウーマンリブ運動の画期性

は、近代国家と家父長制によって母と娼婦に分断・断片化された女性の生と性を取り戻そうとする、比類のない根本的で包括的な文化・生活改革運動、近代超克運動であったことだと指摘され、その後の女性運動の流れをドイツと対比しつつ述べられた。次いで、同報告に触発され、各発題者が大会シンポジウムで何を論点としたいかを中心に、意見交換を行った。

(内藤和美)

■第12期第12回幹事会報告

2004年3月30日13:00-16:30

お茶の水女子大学にて

1. 幹事選挙結果が選挙管理委員会より報告された。選挙結果と新幹事の構成は6月の総会で報告し、次号ニューズレターに掲載予定。
2. 事務局から会員動向報告 瀬戸
現在会員数 704名
12名会員については、会費納入3年間ないため名簿から削除
3. 6月大会について詳細を話し合った。
4. 会費値上げ
次年度より年会費を1,000円上げ、会費7,000円とすることを総会に提案する。値上げ理由説明を会計担当者が総会にて行う。
5. その他
セクハラ規程については経緯報告、問題点指摘、今後の方向性への提案をする。
HP担当者変更について人材を探求し、次期幹事会で決定する。それまでは現担当者に従来どおりの条件で担当して下さるようお願いする。
学会入会会員の承認
個人研究発表をする大学院生などには距離に応じて旅費一部援助のあることを周知する。
編集委員募集 引継ぎできる人がいる必要性あり
次回幹事会 2004年4月25日(日)
12:00より新旧幹事引継ぎを行い、現幹事会は13:00から。
次々回幹事会 5月30日(日)午後6時より
場所はいずれもお茶大

■会員の投稿

皆さんの大学でも性教育の講義を!

細谷 実

皆様ご存知の通り、都立七生高校の性教育授業に対して石原都政による弾圧がありました。

包括的性教育が必要なのは、高校生にも劣らず、大学生に対してもです。そこで、小生のいる学部では、4月から半年2単位の性教育の講義(「性の健康学」)をカリキュラムに入れました。講義の実践的目標は、

1. 望まない妊娠を予防し、事後対処も考える。
2. 性感染症を予防し、事後対処も考える。
3. 性暴力の加害者/被害者にならないようにする。
4. 性的マイノリティ(同性愛者、無性愛者、性暴力被害者、性同一性障害者、なども広く含む)への偏見を克服する。

以上4つです。小中高校における性教育への努力に連続するためにも、ぜひ皆さんの大学・短大でも講義の開設を!

なお、教授会のおじさんたちの反応は、「本当に必要だね」「学生たちは、実践に知識が追いついてなく問題だ」「学生がスーパーフリーみたいな事件を起こすと大変だ」などと、かなり肯定的でした。スンナリ認められますよ。

■会員の著作

- ・青木生子・一番ヶ瀬康子・高良留美子篇
『高良とみの生と著作』全8巻 ドメス出版
- ・高良留美子篇
『世界的に のびやかに 写真集 高良とみの行動的生涯』
ドメス出版
- ・高良留美子著
『百年の発音』上・下 御茶の水書房
- ・マラ・セン著/鳥居千代香訳
『インドの女性問題とジェンダー
サティ(寡婦殉死)・ダウリー問題・女兒問題』
明石書店
- ・伊田広行
『はじめて学ぶジェンダー論』 大月書店
- ・喜多村百合
『インドの発展とジェンダー—女性 NGO による開発
のパラダイム転換』 新曜社

会員からのお知らせ

ICUにジェンダー研究センター設立

ICUジェンダー研究センター（CGS）は、アジアにおけるジェンダー研究のネットワークをつくっていくこと、そのために日本の情報をアジアにそして世界へ発信していくこと、そして自然科学をも組み込んだジェンダー研究の発展をめざすという、大きな目標を掲げて出発しました。

CGSの設立の経緯をたどると、公式には、絹川正吉学長（当時）による「ジェンダー研究諮問委員会」の設置が発端でした。その答申を受け、21世紀にむけたカリキュラム再編の際に、ジェンダー研究プログラムが、「行動するリベラル・アーツ」の一つの柱として位置付けられたのです。CGSは、このジェンダー研究プログラム（2005年度から開設予定）を支えていくセンターとして、本年度から発足することになりました。

いち早く女性学プログラムを立ち上げて活動を広げていた梨花女子大学は、1995年にアジアにおける女性学の発展を目的としてアジア女性学センターを開設し、1998年から2000年の3年間、アジア8カ国から女性学に関心のある関係者を招聘して、アジアにおける女性学の可能性に関するワークショップを開催してきました。このワークショップでは、「英語で出版される欧米研究者による研究へのアクセスはあるのに、アジア地域隣国の情報は極端に少なくお互いにほとんど情報をもっていない」という、驚愕の事実を突きつけられました。自分たちの言葉で自分たちのことを語り、情報を共有していくことの重要性を痛感したのです。私たちは、欧米中心の研究から脱し、アジアから世界に向けて情報を発信していく必要があります。そのためには、アジア諸国の研究者、研究所、NGOなど研究・活動拠点間のネットワーク化を進め、情報の交換・共有や共同研究など推進していくことが急務だと考えました。

アジアでのネットワーク作りを推進していくために、日本の情報を世界に発信していく必要があります。そのために、ニューズレター（NL）やウェブサイトなどの情報発信媒体を充実させ、国内でのネットワーク化も視野に入れつつ、日英両語で日本の情報をアジアに積極的に発信していくことにしました。すでに、日本女性学会会員には、NLを送付させていただきました。目を通していただけるとわかるように、日英両語ですから紙面が限られています。そこで、NLには簡潔にまとめた情報

を掲載し、詳細および関連情報はウェブサイト上で公開して、NLとウェブサイトの強い連携を図っていくことにしました。コンピュータ環境が不十分な地域には、要望があれば、ファックスで全文を送信するサービスも提供します。

ICUでは2005年からジェンダー研究プログラムを発足させるべく準備をしているところですが、社会科学や人文科学だけでなく、科学哲学や科学史などからアプローチして生物学や生命科学などの自然科学をも組み込んだカリキュラム作りに取り組んでいくという目標を掲げました。ICUが教養学部大学であるという特徴を生かした、ICUらしいジェンダー研究のカリキュラムを考えています。このようなジェンダー研究プログラムのカリキュラムの開発、維持、発展に関して、CGSは強力な支援センターとして中心的役割を果たすこととなります。

今年度は、アジア各国からの研究者を招聘して国際ワークショップ（11月26—28日）を開催する企画を立てています。この国際ワークショップは、次のような二部構成になっています。①第一部では、ジェンダー研究カリキュラムの現状と課題について、アジア各国から報告を受け情報を共有する。②第二部では、「人間の安全保障とジェンダーに関する「知」の創造：アジアの視点から」というテーマで、アジア地域内における重要課題、その問題解決に関して、理論的・政策的なアプローチを検討する。このワークショップの成果は、2005年6月に梨花女子大学が主催する、アジアではじめての「世界女性会議2005（第9回）」で、世界にアピールする予定です。

CGSが、ジェンダー・性（セックス）・セクシュアリティに関心のある人々にとって、情報を共有し、考えを深め、コミュニケーションをとる場として、快適なスペースになるように、私どもはいろいろと工夫していきたいと考えています。日本国内のネットワークも非常に重要ですので、協働できる仕組みをぜひ一緒に創っていきたく強く希望しています。ICUのCGSをどうぞよろしく願いいたします。

田中かず子

（ICU、教員）<http://subsite.icu.ac.jp/cgs/>